RESEARCH

「自然の中を走ると、人は日常でも環境にやさしくなる」四万十川ウルトラマラソン参加者を追跡調査。行動変化を科学的に確認

前田准教授らの研究グループは、自然環境の中で行われるスポーツイベントへの参加が、リサイクルや節電など、日常生活における環境配慮行動にどのような変化をもたらすかを明らかにしました。この成果は、地域の自然資源を活かしたスポーツツーリズム政策や、自治体・観光事業者・スポンサー企業の連携にも応用が期待されており、国際的に高い評価を受ける学術誌「Journal of Sustainable Tourism」にも掲載されました。

さらに前田准教授は研究を発展させ、スポーツイベントへの参加で得た自信が自己効力感（「自分ならできる」という感覚）など日常生活にも広がる可能性を科学的に示しています。


四万十川ウルトラマラソン（実行委員会提供）




マラソン参加者への調査は学生とともに実施。発展研究は、8月にタイで行われた国際学会 AASM Conference 2026において、Best Paper Awardを受賞しました。



経済・マネジメント学群
前田 和範 准教授
Kazunori MAEDA

RESEARCH

水質汚染の原因となる物質を次世代エネルギーに変える反応過程を世界で初めて解明。新素材の開発に成功する

博士後期課程3年のユアンさんと、伊藤 亮孝教授、藤田 武志教授らの研究グループは、名古屋大学との共同研究により、水質汚染の原因となる硝酸イオンを、次世代エネルギーや肥料の原料となるアンモニアへ効率的に変換する新素材（触媒）の開発に成功しました。この技術は、農業排水や工業排水に含まれる有害な硝酸を除去するとともに、脱炭素社会の実現に向け注目されるグリーンアンモニアを回収できる“一石二鳥”のクリーン技術として期待されています。

筆頭著者のユアンさんは「今回の成果は今後の研究に向けた確かな基盤を築くものです。今後も、エネルギー変換技術の発展に貢献できるよう研究を続けたいです」と述べています。



同研究は、硝酸イオン（水質汚染の原因物質）を効率的にアンモニアに合成する銅とコバルトからなる触媒の連携メカニズムを解明しました。研究成果は、国際学術誌「Advanced Science」に掲載されました。

指導教員
理工学群
藤田 武志 教授
Takeshi FUJITA

大学院博士後期課程
基盤工学コース3年
（材料組織制御学研究室）
ユアン チュンユ さん
Chunyu YUAN



研究成果の一部を取り上げてご紹介します。より詳しい内容はQRコードからご覧いただけます。

RESEARCH

「人のストレス適応のカギは1時間後」多角的な同時計測によりストレスを受けた後の脳活動を世界で初めて解明

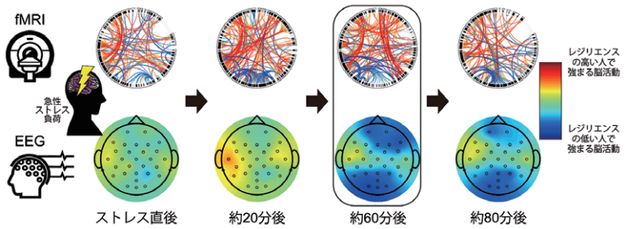
竹田教授らの研究グループは、fMRI（機能的磁気共鳴画像法）とEEG（脳波検査）、さらにストレスホルモンの同時測定により、脳と身体のダイナミクスを網羅的に記録しました。その結果、ストレスを受けてから約60分後に、人間特有のレジリエンス（ストレスに向き合い立て直す力）が現れることを明らかにしました。

これまでブラックボックスだった「人間特有のストレス適応メカニズム」に迫った本研究は、心のしなやかさを生み出す仕組みの解明につながる成果として注目されています。竹田教授は「この知見を実社会で役立て、脳科学で現代社会のストレス問題に突破口を開きたい」と語ります。





総合研究所
脳コミュニケーション研究センター/
情報学群
竹田 真己 教授
Masaki TAKEDA



研究成果は、国際的に影響力の高い総合科学誌「米国科学アカデミー紀要」に掲載されました。





NEWS

データ＆イノベーション学群の新校舎が永国寺に完成！デジタル×ビジネスの融合事例の公開報告会を開く

永国寺キャンパスに新校舎「イノベーション ラボ棟」が完成しました。2026年4月からデータ＆イノベーション学群の2・3年生が学んでいます。6月5日と6日の2日間は、同学群の最大の特徴であるPBL（プロジェクト型実践学修）の公開報告会が開催されました。

新たな学び舎のお披露目も兼ねた今回は、企業や地域と連携する計23の事業に取り組む2・3年生約130名が、AIやデータサイエンス、マーケティングなど日頃の学びをいかした企画や成果を、延べ250名の来場者に披露しました。